

守文の難きを慎まん

明星大学教育学部教育学科 客員教授 長谷川 清 之

平成20年4月、明星大学教職センター実習指導員並びに人文学部教育学科非常勤講師としてお世話になって以来、10年の星霜が過ぎようとしています。当時、実習指導員として石原、小野寺、岩木の各先生が勤務されていました。そこに私と郡司先生、榎本先生の三人が仲間入りしました。蜂須賀、樋田両先生のご退職にともなう後補充でした。

実習指導員の仕事内容は、教職センターの指導業務一般でした。学生に対する生活指導、教職ガイダンスの講話、インターンシップ、教育実習校訪問、東京都教師養成塾事業への参加、論文指導、面接対策指導、研究発表会への参加等でしたが、論文指導やインターンシップの配属学校の割り振りなどの事務の一端を担っていました。また、教職に関わる非常勤講師は、「初等教育実習基礎演習」、「教育学の理論と実践」等でした。現在の「教育実習」、「インターンシップ」に当たるものですが、教育実習生が多く学校訪問校の調整に苦勞しました。私はこの他、国語関係の科目、教員免許更新講習、通信教育の科目修了試験、レポート添削、スクーリング等も担当しました。実習指導員の勤務時間は、一日7時間、週4日と5日勤務を選択できましたが、4日を選択しました。給与は実習指導員と非常勤講師と二本立てで、授業に出る場合は、実習指導の賃金がカットされました。一年後、担当課長の努力もあり、両方を大学の勤務時間とカウントし、4日勤務の私も日本私立学校振興・共済事業団組合に加入することができるようになりました。

多忙な日々でしたが、仕事は「意気に感ず」ことができました。教職とは、教員の仕事とは、学級経営とは、児童理解とは、特別活動とは、生活指導とは、授業作りとは、学習指導要領、教育法規、教材研究、教科指導、実習指導、論文指導、面接指導と…、指導すべきことが山ほどありました。仕事に「断・捨・離」の六十代が、新たな挑戦となりました。教員の合格者が希な時代でしたが、精気溢れる、明るく、素直な、のびのびとした学生に出会えました。この学生を、教員にしたいと心から思いました。昼食時は、学生のこと、授業のこと、仕事の段取りや要望事項を話し合いました。まるで職員団体のように人員増加の要望や授業のコマ数、科目の人数、勤務条件、事務の効率化、大学の経営に関する要求を当時の担当課長やセンター長、学部長に申し上げることが度々でした。

こうした中、小学校をベースに、中・高校教育の教科および教職専門に強く、しかも実践的指導力のある教師のスペシャリストを養成する改組が始まりました。小学校教諭1種(全科)教諭取得に加え、新たに中学校・高等学校教諭1種を同時に取得するための8選修(国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、英語)を設ける教育学部の立ち上げです。小、中学校教員の人事交流、中高一貫教育、連携及び共通理解の観点からの時代の要請に応える経営判断と受け止めました。

平成22年4月より、実習指導員は特任准教授としての辞令をいただきました。今までの仕事が認められ、大学教員としての待遇、勤務条件、研究室等、大幅に処遇改善をしてもらいました。これに伴い懸案であった実習関係の科目や授業の学生数、特に教職に関わる科目の少人数授業が実現していきます。この年、教育学部に一年生が約400名入学しました。毎年、同数の学生が増えていきます。そして、特任の先生方が毎年新しく発令されてきました。平成25年度第一期の卒業生は、正規採用、期限付き併せて90名が教員採用試験に合格しました。この後、毎年、131名、133名、160名と多くの合格者を輩出しています。平成25年度の論文基礎講座に関わった教員は16名でしたが、現在は29名が担当しています。平成27年には新しく33号館が竣工し、特任の先生方の研究室が整備されました。特任准教授退職後は、大学と学校との連携に関わる専門職として教育実習や論文指導に関わる道も整えられました。現在19号館相談室に、15名の専門職の先生方が仕事をされています。本年度より特任准教授が特任教授へ、専門職が客員教授

として遇されることになりました。

教育学部立ち上げ以前から今日までの充実・発展を鑑みると、まことに感慨深いものがあります。同時に、「草創と守文と孰れか難き」(貞観政要)という問いを想起させられます。太宗の問いに、房玄齡は「草創を難しと為す」と魏徵は「守文難し」と答えます。創業の苦勞とこれを維持する苦勞、両者ともそれぞれの時代に生きることの難さをを語っています。これに対して、太宗は「今、草創の難きは、既に以^すに往^すけり。守文の難きは、公等と之を慎まんことを思うべし」と、自らを慎み、自己中心、慢心を自戒しています。草創の困難はもはや過ぎ去って、守文の困難に立ち向かう気構えを述べています。

本学は、1964(昭和39)年の開学以来、「和の精神のもと、世界に貢献する人材を育成する」目標の基に、「人格接触による手塩にかける教育」や「実践躬行の体験教育」の理念を掲げています。開学当初からすべての学部・学科に教職課程を開設し、次世代を担う教育者として、人間性豊かで社会性と専門性を備えた、熱意ある教師の養成に努めてきました。今、「教育の明星」としての評価を確固にしています。

現在、百名を遙かに超える教員を毎年送り出しています。こんな時代だからこそ、「之を慎まんことを思うべし」です。小林先生が初めて教育現場から大学に入り、その後、蜂須賀、樋田、石原、小野寺、岩木先生と続く時代を含めての15年間は、正に草創の時代であったと思います。今は、物的、人的な環境、運営・組織等が整備、充実され、教育学部の使命として教員育成に成果を上げています。守文の時代を迎える心構えが必要でしょう。それは、現状を維持できればよいということではなく、教育内容を充実することです。自己中心や慢心を慎み、大学の掲げる理念をどのようにして実現するのか、各人ができることを改めて問い直すことが必要です。「熱意ある」「人間性豊かな」「実践的指導力のある」教師の育成は、各教科等の指導力向上が不可欠です。人として豊かに、学び続ける姿勢を備えた「磨きあい高めあう熱意ある教師」の育成は、指導する側に問われる課題でもあります。自らの原点に立ち返り、本気で教師をめざす一人ひとりの学生をどのように支援するのか、自身の能力開発に取り組むことが重要です。

私は、この10年間、明星大学の教員として各学校の校内研究会に国語講師として参画してきました。ここ数年、現場の人事構成が様変わりしています。経験年数10年未満の若手教員が大半を占めています。この間、授業時数が増え、勤務時間内で授業準備、研究に取り組む時間の確保が難しくなっています。何より教員相互の学び合いが劣化しているように思えます。国語科指導は教材研究が命です。例えば、『ごんぎつね』では、物語の結節点である「その明るる日も」の「も」を読むことが大切です。「も」は語り手の陳述性の高い「陳述の副助詞」といわれています。ごんの行為の意味を考える窓口が「も」なのです。「白いぼうし」では、白いぼうしを取り上げたとたんにファンタジーのスイッチが入ります。女の子が松井さんを小さな野原の前に連れて行きます。松井さんには、シャボン玉のはじけるような小さな声が聞こえてきます。松井さんの心象に筆者の願いが込められています。教材を自ら掘り下げて読み、言葉の意味を追究する学習を実現するためには、教師の読む力が大事です。教師の教材観、指導観が見えない、基礎的、基本的な知識、感性・教養に疑問を持たざるを得ない授業を何度も見てきました。大学で学ぶべきこと、そして学校現場で磨くことは何かを考えさせられました。

「ごんぎつね」は各社で取り上げられている教材です。新美南吉の文学を読み、教材としての可能性を発掘するためには読書経験が必要です。「白いぼうし」の4冊のシリーズ本を読み込み、現実と非現実の「間^{あわい}」で不思議な体験をする松井さんを通して、作者の願いを知ることが大切です。読むことの体験無しに指導はできません。教育計画や時間に縛られることなく、自由な学びは大学だからできることです。よい読み手を育てることが大事です。それぞれのキャリアを生かし大学で指導すべきことは何か、教員を育成する意義を問い直すことが大切です。指導技術や知識、特に学級経営や児童理解等は教員となってから身につけるものです。

教員になってからも意欲的に学ぶことができる学生を育てることが大事です。子どもにこんな体験をさせたい、この教材でここを指導したいという願い・理想・志を立てることが大事です。国語科は、話す・聞く・書く・読む言語活動を通して国語力を磨くことが大切です。多くの作品を読んだり、価値ある話題

を話したり聞いたり、書いたりする基礎的な体験をすることが重要です。また、文献や実践報告、資料に触れ、教員として必要な知識や感性を育むことが大事です。教職教養や教科教育に関する知識の習得を受験勉強ばかりではなく、日々の講義や演習、自主的な学習、体験活動、任意の部活、アルバイト等、大学生活を通して学ぶことが大切です。教育は人を育てる仕事です。使命と責任を自覚し、どのような学級を実現するのか、授業や生活指導、人権教育、キャリア教育等について、元気に語れる、志気の高い、理想をもった学生を育てることが肝要です。

この度、『明星大学教職センター年報』を創刊することになりました。教職課程の研究・活動の成果を学内外に発信するものです。誠に時宜を得た企画と賛意を表します。各位それぞれがキャリアを生かし、創意ある研究に取り組まれることを期待します。大学でしかできないこと、そして現場の教育実践に寄与できる研究を期待します。平成32年より、新しい学習指導要領が全面実施されます。実際にこの学習指導要領を具現するのは教師です。チームとして実践に取り組み、そこで育つ子どもの姿が研究の成果であり学校の特色です。教員の資質・能力の向上無しにどのような理想の教育を掲げても絵に描いた餅です。実践的な研究にマニュアルはありません。だからこそ何十年も取り組める研究です。研究は現場の教員と一緒にあって、両輪として子ども達の教育を創っていくことを切に願います。このことが「次世代を担う教育者として、人間性豊かで社会性と専門性を備えた、熱意ある教師の養成を目指す」本学の目指す教員養成に直結するものと確信します。

最後に、今後の明星大学の発展を願いいくつかの課題を述べ御礼とします。合掌。

1. 教育現場の充実には、実践研究は不可欠である。教科書と指導書があれば授業ができるというわけではない。今までの指導を継承し発展させなくてはならない。何を引き継ぎ、どこを止揚するのか、新しく取り組むことは何か、指導観、教材観を構築することが重要である。
2. 各自のキャリアの教授だけでなく、キャリアを生かした大学だからこそできる研究に取り組むことが肝心である。これを教員を目指す学生に、現場の教員に還すことが大切である。また、現場の抱えている問題について、共有、協働することが大事である。
3. 研究成果を発表し、多くの卒業生の実践発表の機会を設け、相互啓発の機会とする。併せて、これから教員になる学生の学ぶ機会や現場の教員の研修の場を提供する。数年に一度は全国規模で「明星大学教育学部実践研究交流会」を開催したい。
4. 教職に関係する資料、現場の研究物を収集し整理する。教職に関わる「教職資料アーカイブセンター」を構築する。センターに行けば必要な資料が得られる。必要なレファレンスが受けられるようにする。このための専門職を設ける。常時学生のニーズに対応できるようにする。
5. 授業で使用する自前の教科書、教職に関する図書を発刊する。単著、共著、監修でも教科書を創ることが重要である。学生が自学自習できるようになる。特に通信教育は、教科書を基本に学んでいる。